

編集後記

編集委員

委員長

藤田郁代

副委員長

立石雅子

宇野彰

勝木準

熊倉勇美

倉内紀子

小林範子

城間将江

関啓子

玉井ふみ

矢守麻奈

言語聴覚研究第3巻1号をお届けします。創刊号の発行から既に1年余が経過し、本号は通算で第5号となります。

本号は第6回日本言語聴覚学会におけるシンポジウム「根拠に基づいた言語聴覚療法：evidence based practice」のシンポジストの先生方に講演の内容について寄稿していただきました。種村純先生は研究方法によるエビデンスのレベルの評価の枠組みを解説され、藤野博先生は小児の領域における単一事例実験デザインを用いた結果を報告され、城本修先生は音声治療の領域、小嶋知幸先生は失語症の領域において、それぞれ evidence based practice の歴史と課題を解説されています。言語聴覚障害分野におけるエビデンスが十分でないことは誰の目にも明らかです。日々の臨床において個々人が evidence based practice を心がけることがまず重要です。そのことが専門職として責任を持って言語聴覚障害のある方々に対応していくことであり、言語聴覚療法の質を高めることにつながります。言語聴覚障害のさまざまな領域で、個々の結果を組織的に集積し、治療ガイドラインの策定をしていく必要性を強く感じています。

原著論文は2点です。1つは単一事例研究デザインを用いて慢性期の失語症例に音読訓練を実施し、その効果からメカニズムを推測するという evidence based practice の実践といえる研究です。もう1つは知的障害児通園施設におけるコミュニケーション・言語発達支援に関する実態調査を基に、言語聴覚士の役割や課題をまとめた研究で、この領域の実態調査は例がなく、重要なテーマです。また自閉症スペクトラム障害児へのコミュニケーション支援に関する短報が掲載されています。

現場最前線では、がんという疾患に対し、対象とする言語聴覚障害の種類は変わらないものの、疾患の特殊性から独自の対応を要求される、いわば「特化した」言語聴覚士の役割が紹介されています。

5月には第7回日本言語聴覚学会が金沢において開催されます。演題数が急増し、領域の広がりと会員の皆様の活力を示すものであり、この領域の発展にとって心強い限りです。是非、臨床に根ざす研究を本誌にも発表していただきたいと思います。

(立石雅子)

言語聴覚研究(第3巻 第1号)2006年3月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 8-5-8 正和ビル 304

(☎03-5338-3855 FAX 03-5338-3856) <http://www.jaslht.gr.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Showa-Build. #304, 8-5-8 Nishishinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0023, Japan

©2006, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 5-24-3(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)